

作物名：トマト
病害虫名：葉かび病（病原：*Passalora fulva*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- 葉、茎に発生する。葉では初め退色～白色の円形病斑が現れ、病斑が拡大するとともに黄化し、葉裏では病斑上に灰～黄褐色、茶色、灰紫色、オリーブ色などのピロード状のかびを生じる。さらに病徴が進展すると、葉表にもかびを生じる。また、まん延すると茎や果実のへたにも発生する。
- 感染から病斑が現れるまでの潜伏期間は約2週間である。分生子の形成が始まると大量に分生子が形成されるため、空气中に飛散した分生子により急速に感染が拡大する。
- 病斑は必ず下位～中位葉から発生し、上位葉へ進展する。
- 病徴はすすかび病に類似しており、肉眼での判別は困難なため、診断には顕微鏡による分生子の形態観察が必要である。総合倍率 100 倍程度の小型顕微鏡があれば現地診断が可能である。
- 本病菌の分生子は楕円形、樽形であり、分生子が棒状のすすかび病と容易に区別できる。
- 本病の発生は生育後半の着果負担による草勢低下や肥料切れの状態で助長され、すすかび病とは異なり高温時期や生育旺盛な時期には発生が少ない。



写真1 葉表の病徴

2 伝染源・伝染方法

- 本病菌は被害植物の残渣で越冬し、翌年の伝染源となる。
- 被害植物の病斑上の分生子が、風により飛散し伝染を繰り返す。

3 発病しやすい条件

- 本病菌は糸状菌の一種で不完全菌類に属する。菌の生育温度は5～30℃で、適温は23℃前後である。
- 発病適温は20～25℃で、多湿条件で発生が多くなる。15℃以下の低温や30℃以上の高温では病勢の進展は遅くなる。
- 本病菌はトマトだけに感染する。

4 防除方法

- 多湿条件で発生しやすいので、密植、過繁茂を避け、換気による湿度管理に留意する。
- 発病葉や被害残渣は伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- 病斑は主に葉裏に形成されるので、薬剤散布は薬液が葉裏に十分かかるようていねいに行う。
- 異なる抵抗性遺伝子（*Cf-2*、*Cf-4*、*Cf-9*）をもつ品種が市販されているが、それぞれの抵抗性遺伝子をもつ品種を侵すレースが国内で確認されているため、抵抗性品種を過信せず発生に注意する。

5 出典

(1) 参考文献

- 農業総覧原色病害虫診断防除編2-①（農文協）
- 農業総覧病害虫防除・資材編2（農文協）
- 普及に移す技術第87号（宮城県）

(2) 写真

- 宮城県農業・園芸総合研究所撮影



写真2 葉裏の病徴

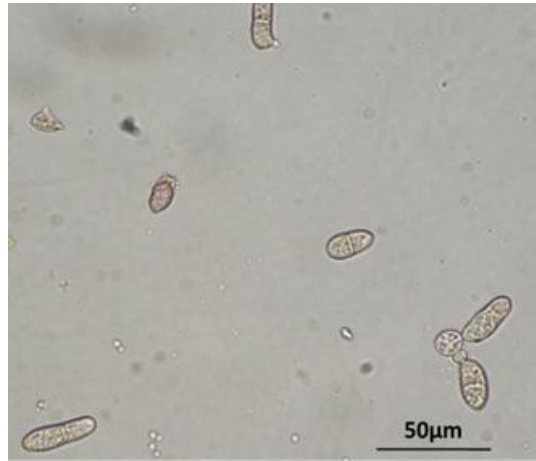


写真3 葉かび病菌の分生子

(令和5年9月改訂)